

第 7 期美幌町総合計画

基本構想（素案）

第1章 はじめに

1. 第7期美幌町総合計画 策定の趣旨

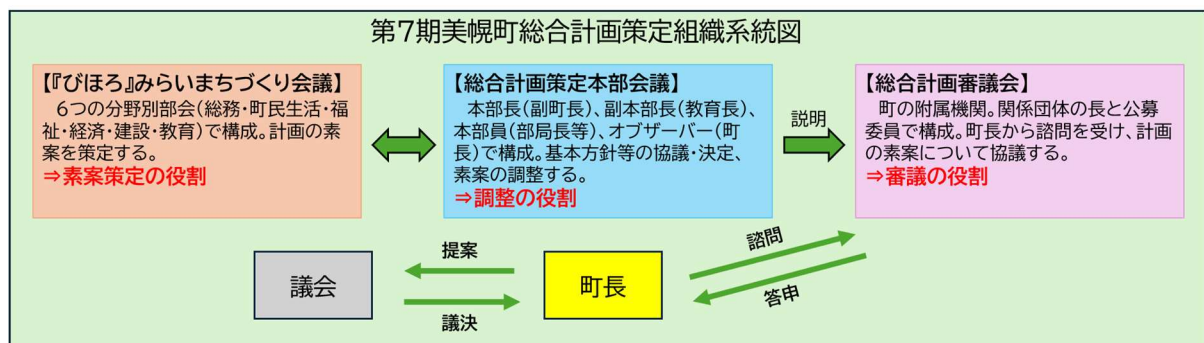
平成23年4月、美幌町自治基本条例の施行により、町民が主役のまちづくりや協働の推進・コミュニティ活動を明文化しました。美幌町は過去より住民参加や協働が盛んでありますが、各ボランティア団体等はメンバーの固定化や高齢化が進み、若者の参画や後継者不足が引き続き課題となっています。

美幌町では、昭和41年に第1期総合計画を策定して以来、時代の変化に応じて総合計画を見直しなが、まちづくりを進めてきました。人口増加期には生活基盤や公共施設の整備を中心に、人口減少局面においては、既存の基盤を活かし、人づくりや地域の力を重視するまちづくりへと転換してきました。

第6期総合計画の期間においては、全国的な人口減少・少子高齢化の進行、地域経済の構造変化、頻発・激甚化する自然災害、さらにはデジタル技術の急速な進展など、社会経済環境はこれまで以上に大きく、かつ複雑に変化してきました。こうした変化は、町の持続可能性や暮らしのあり方そのものを問い直す契機となっています。

また、地方分権の進展により、自治体にはこれまで以上に主体的な判断と創意工夫が求められる一方、行政だけで地域課題を解決することには限界があり、町民、地域団体、事業者、関係人口など、多様な主体との協働・共創によるまちづくりが不可欠となっています。

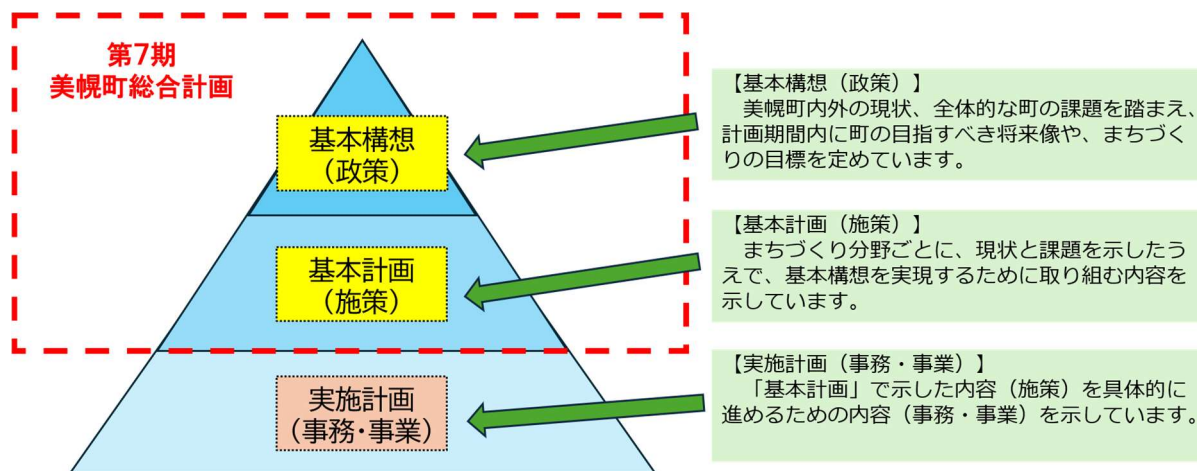
本町では、総合計画を「まちの憲法」と位置付ける美幌町自治基本条例の理念のもと、引き続き町民主体のまちづくりを基本とし、町民主体の『びほろ』みらいまちづくり会議において、第6期総合計画の取り組みや成果を検証しながら、将来にわたって美幌町の魅力と住みよさを高めていくため、第7期美幌町総合計画を策定するものです。



2. 総合計画の構成と期間

(1) 構成

この計画は、「基本構想」「基本計画」「実施計画」の3つから成るピラミッド型の構成になっています。それぞれの部分が示す内容は次のとおりです。



(2) 計画期間

この計画は、令和9年度（2027年度）から令和20年度（2038年度）までの12年間を計画期間とします。「基本構想」「基本計画」「実施計画」のそれぞれの期間は次のとおりです。

区分		2027年 (R9)	2028年 (R10)	2029年 (R11)	2030年 (R12)	2031年 (R13)	2032年 (R14)	2033年 (R15)	2034年 (R16)	2035年 (R17)	2036年 (R18)	2037年 (R19)	2038年 (R20)
総合計画	基本構想 (12年)												
	基本計画 (4年×3)	前期				中期				後期			
	実施計画 (3年ローリング)												
	ローカル マニフェスト	前期				中期				後期			

- 基本構想：12年間
- 基本計画：4年間（町長公約との整合を図りつつ見直し）
- 実施計画：3年間のローリング方式

長期的な視点と社会情勢の変化に対応する柔軟性を両立させるため、基本構想は中長期の指針として位置付ける一方、基本計画・実施計画については定期的な検証と見直しを行い、計画の実効性と時代適合性を高めていきます。

3. 美幌町の概要

(1) 沿革

多くの清流が合流して水量が豊富なところを、アイヌ語で「ピ・ポロ＝水多く・大いなところ」といい、これが町名の由来となりました。明治 20 年に美幌外 5 カ村戸長役場が設置され、対象 4 年に 2 級村制を施行し、「美幌村」となりました。更に、同 8 年に津別村を分村し、同 12 年に「美幌町」となりました。

(2) 位置・地勢

北海道東部のオホーツク総合振興局管内に位置し、東は小清水町、西はオホーツク圏の中核都市である北見市、南は津別町・弟子屈町、北はオホーツクの空の玄関口「女満別空港」を有する大空町の 1 市 4 町に隣接しています。また、国道 4 路線、道道 6 路線、JR 石北線を有し、道内主要都市を結ぶ交通の要衝となっています。

総面積は 438.41 km²で、東部に藻琴山（標高 999.6m）をはじめ高い山並みがありますが、その他は標高 200～300m の大地が西北に傾斜し、町の中央部を北流する河川の両岸には肥沃な平地が帯状に広がる地域です。

町内には、美幌川や網走川をはじめ大小 60 本を超える川が流れ、これら流域に沿って拓かれた肥沃な大地、そして高い日照率により、農業生産に適した地形を有しています。町の象徴的な景観である「美幌峠」は、屈斜路湖を一望できる観光拠点として広く知られています。

(3) 気候・自然環境

オホーツク海沿岸と北見内陸地帯の中間に位置し、オホーツク海流・海霧・流氷の影響を受けやすく、夏には一時高温を記録するものの、年間を通すと冷涼な気候です。また、降水量も道内では最も少なく、日照率の高さは国内有数の地域です。

また、町内には、美幌川や網走川をはじめ大小 60 本を超える川が流れ、これら流域に沿って拓かれた肥沃な大地、そして高い日照率により、農業生産に適した環境を有しています。町の象徴的な景観である「美幌峠」は、屈斜路湖を一望できる観光拠点として広く知られています。

(4) 交通

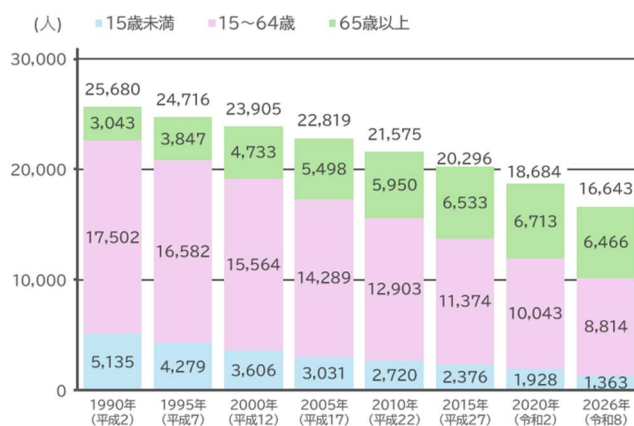
国道 4 線が交わり、高規格道路が横断する交通・流通の要衝であり、アクセスが非常に充実しています。また、網走、札幌を結ぶ鉄道・都市間バス、近隣の市や町を結ぶ路線バス、更に全国主要都市を結ぶ女満別空港が、市街地から約 10 分と近距離にあり、利便性の高い公共交通機関が充実しています。

（５）美幌町の人口

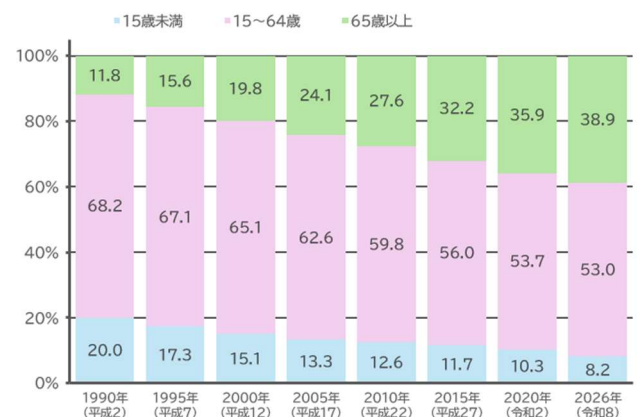
人口は、国勢調査によると 1985 年（平成 2 年）に最多となる 26,686 人となりましたが、その後は減少傾向に転じ、現在までその傾向が続いています。年齢 3 区分人口については、65 歳以上の人口が増加を続けており、2000 年（平成 12 年）には年少人口（15 歳未満）と老年人口（65 歳以上）が逆転しました。

年齢 3 区分別の構成比の推移を見ると、15 歳未満（年少人口）と 15～64 歳（生産年齢人口）の構成比が低くなる一方、65 歳以上（老年人口）の構成比は高くなっており、少子高齢化が進んでいることがわかります。

＜人口の推移＞



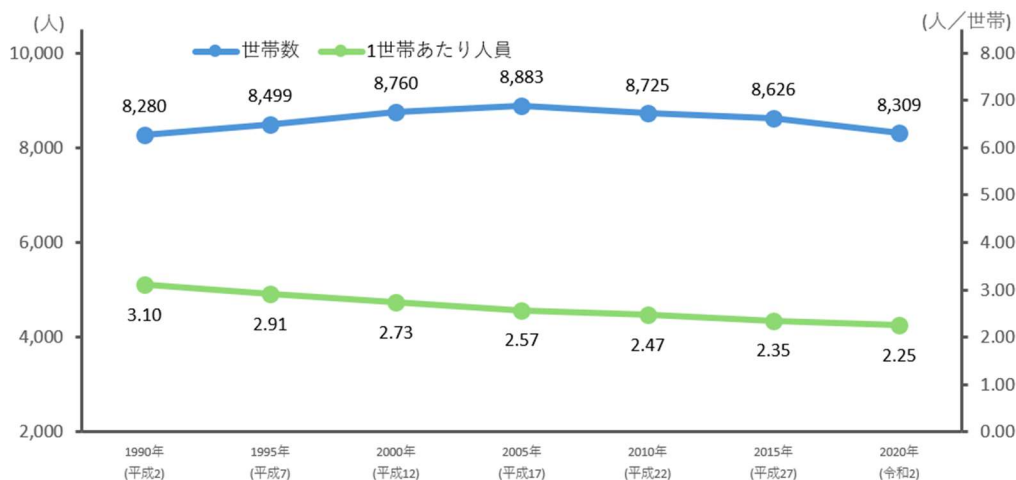
＜年齢 3 区分人口構成の推移＞



※上の 2 つのグラフの数値は、令和 8 年のみ住民基本台帳（令和 8 年 3 月末現在）、その他は国勢調査の数値です。
 ※合計には年齢不詳の人口が含まれているため、各項目の合計とは一致しません。

世帯数については、2005 年（平成 17 年）の 8,883 世帯をピークに減少し始め、人口とあわせて減少傾向にあります。1 世帯あたり人員も同様に減少傾向にあり、2020 年（令和 2 年）は 2.25 人となっています。

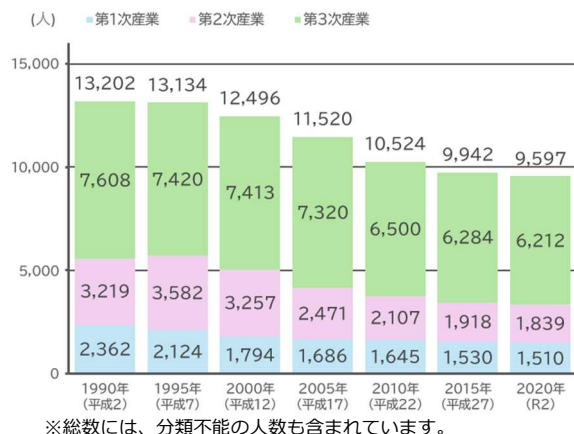
＜世帯数と 1 世帯あたり人員の推移（国勢調査）＞



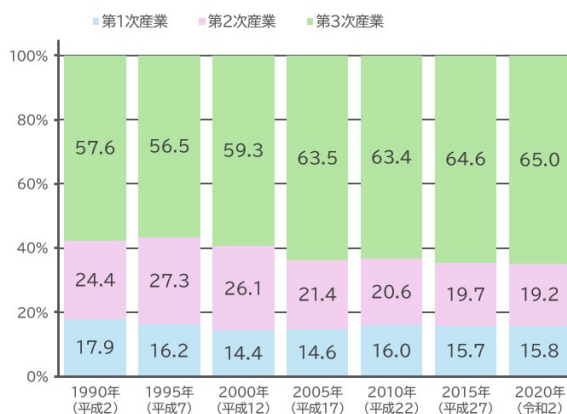
就業人口については、総人口と同じく減少傾向にあり、2020年（令和2年）には総数が9,597人となっています。

産業別就業人口の構成比率については、第1次産業の比率が減少し、第3次産業の比率が増加する傾向にあります。

<人口の推移>



<年齢3区分人口構成の推移>



(6) 美幌町の産業

1) 農業

農用地は網走川と美幌川の両岸に広がる帯状の沃野を形成しており、いずれも表土層は腐植に富んでいて農作物の生育に適しています。積雪寒冷という厳しい自然条件の制約を受けながらも、適地適作によりこれを克服し、高い日照率に支えられ約1万700haの耕地に耐冷性の高い小麦、甜菜、馬鈴薯、豆類を中心とした畑作4品や玉ネギや人参の作付けも大規模に実施され、さらにアスパラガスなどの収益性の高い野菜も栽培されています。

2) 商業

隣接する町の中では最も人口が多く、町外からの集客も期待できる地域の一つです。町は、いち早く店舗リフォームや起業に関する支援を実施するとともに、商店街の枠を超えた共通のプリペイドカード事業に対し、手厚い補助を行うなど積極的に町内経済の活性化を図っています。

3) 観光

オホーツクのほぼ中心に位置し女満別空港が近く、またJRやバスなどの交通の便が充実していることから、オホーツクの観光の拠点となっています。屈斜路湖の雄大な景観が人気の美幌峠には、毎年多くの観光客が訪れます。

4. 考慮すべき社会背景

(1) 人口減少・少子高齢化

人口減少・少子高齢化の進行により、今後は地域社会を支える人口規模そのものが縮小していくことが避けられない状況にあります。社会を支える担い手が量的に縮小する社会の到来を見据え、これまでの成長や拡大を前提とした考え方から、限られた人材や資源の中で持続可能な地域を維持していく発想への転換が求められています。今後のまちづくりにおいては、人口増加を目的とするのではなく、地域の規模に応じた適切な機能やサービスを見極め、質を重視した地域づくりを進めていく視点が重要です。

(2) デジタル化の普及と AI の活用

働く世代の減少が進む中、デジタルや AI の活用は、人材不足を補い、業務の効率化や省力化を図るための有効な手段となっているほか、行政手続や内部業務の効率化にとどまらず、医療・福祉、産業、防災、地域活動など、さまざまな分野での活用が求められています。あわせて、デジタルデバイドへの配慮や誰もが利用できる環境整備も重要です。

(3) 安心・安全の確保

気候変動の進行に伴い、自然災害の激甚化・頻発化が懸念される中、防災・減災対策の強化が求められています。インフラの整備や維持管理に加え、地域コミュニティによる見守りや支え合いなど、日常的なつながりを生かした防災力の向上が重要であり、安心・安全な暮らしを支える基盤づくりが必要です。

(4) 行財政運営

人口減少や財政制約が進む中、行政がすべての役割を担うことが難しくなっており、住民、地域団体、企業など多様な主体が連携・協働し、共に地域を支えていく体制づくりが求められています。また、健全財政の維持や公共施設の適正管理などにも対応しながら、持続可能な行財政運営を確立する必要があります。

(5) 環境・エネルギー

2050 年カーボンニュートラルの実現に向けて、再生可能エネルギーの導入促進や資源循環の取組が求められています。脱炭素の取組を環境対策にとどめるのではなく、地域資源の活用や新たな産業・雇用の創出につなげることで、地域経済の活性化や持続可能なまちづくりを進めていく視点が重要です。

(6) 多様性と共生

人口減少社会においては、地域内外の多様な人材や関係人口との関わりを広げるとともに、多文化共生やジェンダー平等の推進など、誰一人取り残さない社会づくりが求められています。多様な主体がそれぞれの役割を担いながら、支え合い、活躍できる環境を整えることが、地域の持続性と活力の向上につながります。

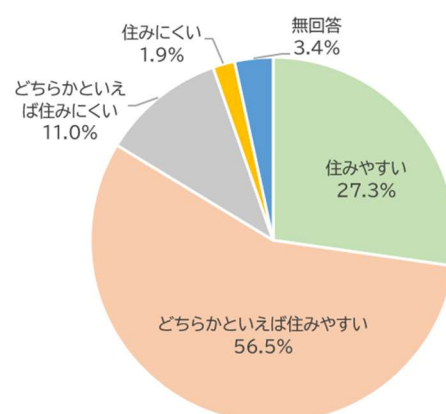
5. これまでのまちづくりに関する評価

この計画を策定するにあたって、美幌町に住む 18 歳以上の方を対象にアンケートを実施したほか、若者世代や陸上自衛隊美幌駐屯地に出向き意見を伺いました。

このうち、町民アンケートについては、令和 7 年 7 月に実施し、612 名の方から回答をいただきました。この結果から、美幌町のまちづくりへの評価やこれからのまちづくりへの意向についての主な内容は次のとおりです。

(1) 住みごころ

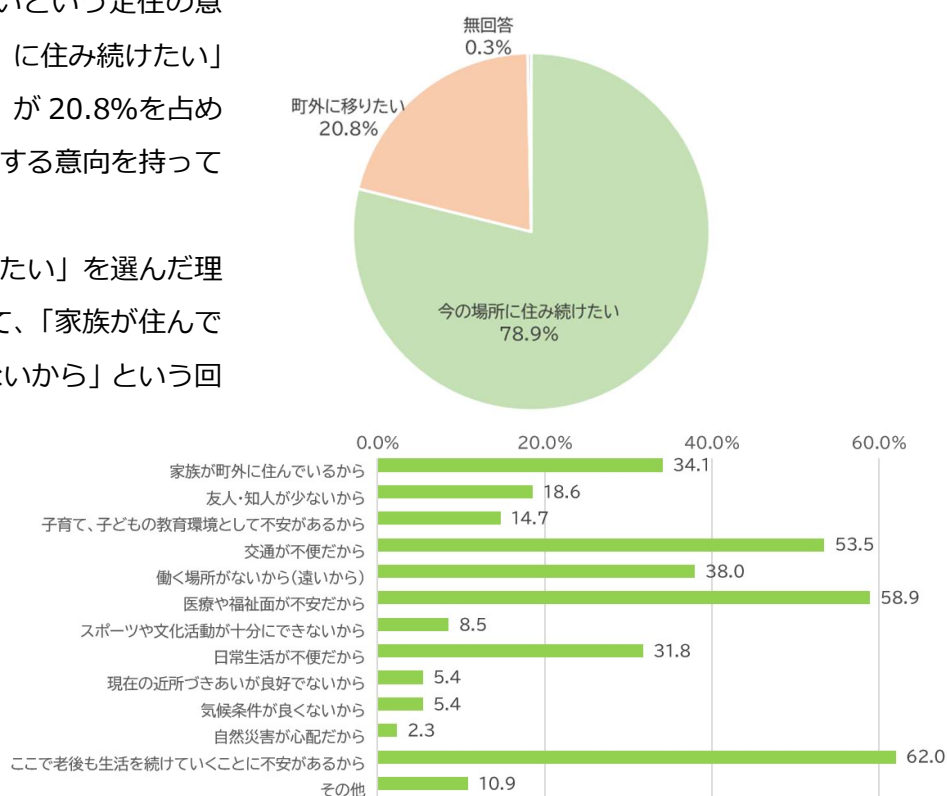
現在の住みごころについて、「住みやすい」が 27.3%、「どちらかといえば住みやすい」が 56.5%を占めています。この 2 つの回答を合計すると 83.8%となり、約 84%が住みごころに肯定しているといえます。



(2) 定住の意向

これからも町に住み続けたいという定住の意向について、「今の場所（町内）に住み続けたい」が 78.9%、「町外に移りたい」が 20.8%を占めました。約 80%が町内に定住する意向を持っているといえます。

また、「今の場所に住み続けたい」を選んだ理由のうち、特徴的な内容として、「家族が住んでいるから」や「自然災害が少ないから」という回答が多く挙げられました。



(2) 将来の美幌町に望む姿

町民アンケート等では、「子育てしやすいまち」「医療・福祉が充実したまち」「安心して暮らせるまち」「働く場所があるまち」など、生活基盤の充実に関する意見が多く挙げられています。また、自然環境の豊かさが高く評価されており、「自然環境が守られたまち」を望む声も多く見られます。

これらのことから、安心して暮らせる環境の充実とともに、雇用の確保や地域資源を生かした魅力ある暮らしの実現が重視されていることがうかがえます。

(3) 今後のまちづくりで特に重要と思うこと

町民アンケートでは、医療環境や国保病院の充実、子育て支援の充実、雇用の場の確保、公共交通の維持・確保、商工業の振興などについて重要度が高い一方で、満足度が十分に高まっていない分野として課題が挙げられています。特に、高齢期の生活や通院に対する不安、若年世代の就労機会の不足に対する課題意識が強く見られるほか、地域コミュニティにおいても、担い手の高齢化や固定化、若い世代の参加のしにくさが指摘されています。

こうしたことから、若者の定住促進や地域経済の活性化、移住・定住の促進などとあわせて、持続的な地域運営に向けた取組の強化が求められています。

6. 今後のまちづくりの課題

(1) 人口減少・少子高齢化への対応

人口減少・少子高齢化がまちづくりにおけるあらゆる分野の前提条件として挙げられており、子どもや若年層の減少、世帯規模の縮小により、学校・商業・地域活動の維持が難しくなっています。

今後は、関係人口の創出を含め、誰もが安心して暮らせる環境整備など移住・定住促進に向けた取組のほか、町民と行政が協働しまちづくりを推進する必要があります。

(2) 地域経済の活性化

商店街の衰退や空き店舗の増加、農業をはじめとした基幹産業における後継者不足、商業・サービス業での人手不足など、地域経済の活力低下が懸念されています。また、「農業を核とした6次産業化」「起業・チャレンジしやすい環境づくり」など新たな産業の創出や雇用の場の確保、地域資源を生かした稼ぐ力の向上が求められています。

今後は、行政と町民、関係団体との連携、更には、農業や商業、観光など各分野が連携した新たな取組を展開することが必要です。

(3) コンパクトなまちづくり・交通・インフラの維持

人口減少や高齢化が進む中で、空き家・空き店舗の増加や中心市街地のにぎわいの低下が進み、人口減少下でも成り立つまちの構造への転換が求められています。

また、JR 無人化やバス路線の縮小などにより移動手段の確保が課題となっており、公共交通の維持、新たなモビリティの活用、歩いて暮らせるコンパクトな市街地形成に加え、道路・橋梁など生活を支えるインフラの確保・維持による持続可能な都市構造への転換が必要です。

(4) デジタル社会・AI の活用への対応

人口減少や高齢化が進む中で、行政手続の効率化や住民サービスの向上に向け、デジタル化やAI の活用を進めていく必要があります。一方で、高齢者を中心にデジタル機器やオンライン手続への不安も想定されることから、すべての町民がデジタル化の恩恵を享受できる環境づくりが課題となっています。

そのため、行政手続のオンライン化や情報発信の充実を進めるとともに、デジタルデバイドの解消に向けた支援や、誰もが利用しやすい仕組みづくりを進めることが必要です。

(5) 教育環境の整備

人口減少・少子化の進行により、児童生徒数の減少や学校を取り巻く環境の変化が進んでおり、将来にわたって子どもたちが安心して学べる教育環境の整備が求められています。また、長寿化が進む中、生涯を通じて学び続けられる環境が求められています。

今後は、ICT 教育の活用や地域と連携した多様な学びの場、郷土への愛着を醸成する教育環境の充実、そして、子どもから高齢者まで、誰もが楽しく学び、活動できる機会を創出することが必要です。

(6) 地域コミュニティの維持・強化

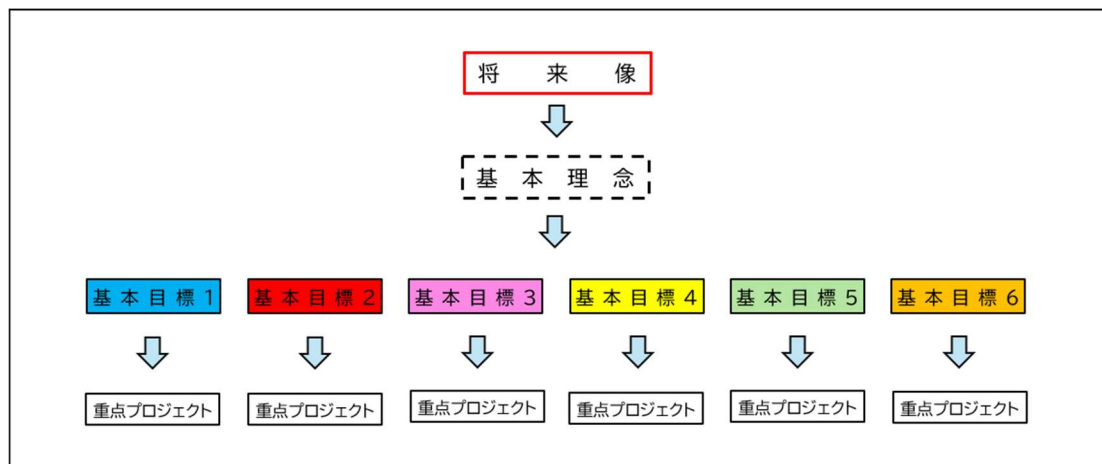
自治会や地域活動への参加者減少、担い手の高齢化・固定化が進み、「助け合い」や「つながり」が弱くなっており、人口減少や高齢化が進む中では、医療・福祉、防災、日常生活の支え合いなどを地域で補い合う力がこれまで以上に重要となっています。

今後は、地域のなかで無理なくお互いを支え合う「ゆるやかなつながり」による地域コミュニティを創出し、誰もが孤立せず、安心して暮らし続けられる支え合いの仕組みづくりが必要です。

第2章 基本構想

1. 基本構想の構成

基本構想は、全体的な課題を捉え、将来の町の姿を示す「将来像」、そして、将来像を実現するために、行政や町民、関係団体等が共通して大切にしている価値観や姿勢を示す「基本理念」、実現に向けて取り組んでいくうえでの方針を「基本目標」といった、3つの項目により構成されます。また、基本目標の下には、目標達成に向けて重点的に取り組む内容を「重点プロジェクト」として設定します。

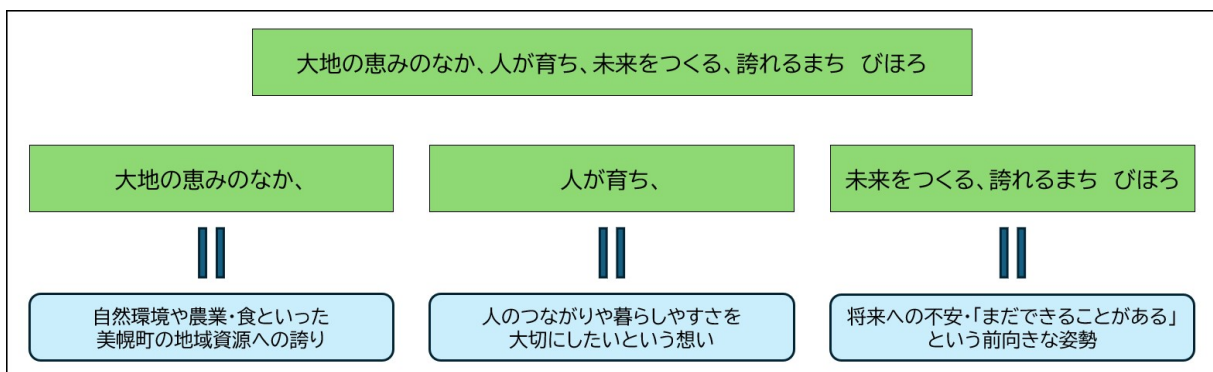


2. 将来像

大地の恵みのなか、人が育ち、未来をつくる、誇れるまち びほろ

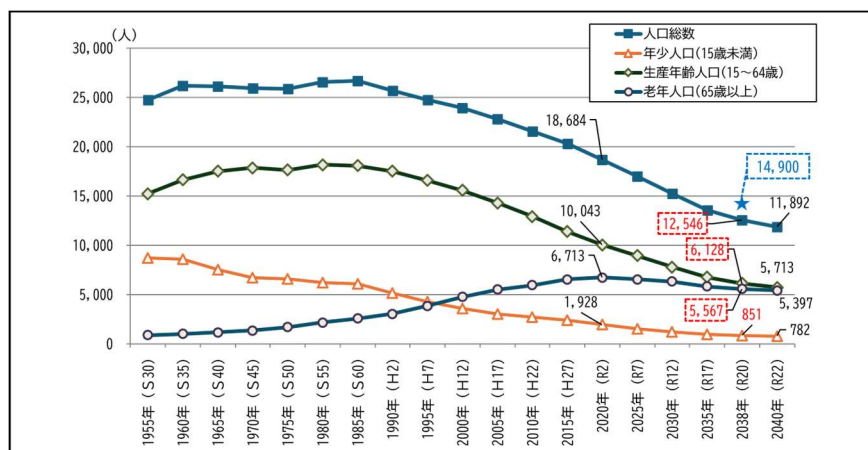
美幌町が培ってきた大地や水などといった地域資源は他の自治体にはない強みです。学びや地域活動を通じて人が育ち、産業によって未来がつくられ、地域に誇りを持つことができる暮らしの実現により、美幌町らしい価値を次世代へ確実につなぐことを示すものです。

＜将来像の考え方＞



3. 人口の指標

これまでの人口の動きをふまえ、今後の総人口を推計すると、第7期総合計画の期間が終了する2038年（令和20年）には、12,546人まで減少する推計となります。この計画では、出生数を確保するための子育て支援、転出を抑制し転入を増やすためにいつまでも美幌町内で住み続けられる環境づくりなど、人口減少を抑制するための取り組みを積極的に進めることとし、計画最終年次である2038年（令和20年）の目標人口を14,900人と設定します。



→人口の推計

→人口の指標 ※年齢区分別は右記の表

	2010年 (H22)	2015年 (H27)	2020年 (R2)	2038年 (R20)
15歳未満	2,720	2,376	1,928	1,016
15～64歳	12,903	11,374	10,043	7,276
65歳以上	5,950	6,533	6,713	6,608
合計	21,575	20,296	18,684	14,900

※2020年までは国勢調査の実績値。(合計には年齢不詳の人口が含まれるため、各項目の合計とは一致しません。)

4. 基本理念

(1) 町民を主体としたまちづくりの視点＜関わりたくなる＞

人口減少が進む中、行政だけでは地域課題に対応することが難しくなることもあり、町民一人ひとりがまちづくりの担い手として関わるのが重要です。それぞれの関心や得意分野に応じて参加できる仕組みを整え、行政だけでなく、町民を主体としたまちづくりを進めます。

(2) 先進技術を活用したまちづくりの視点＜チャレンジしたくなる＞

人口減少が進む中、限られた人材や資源の中でも暮らしやすさを維持しつつ、更には新たな取組や挑戦を生みだしていくことが求められます。そのため、デジタル技術の活用、先進的な取組や新たな仕組みを柔軟に取り入れ、誰もが挑戦したくなる、持続可能なまちづくりを進めます。

(3) 多様な人々が暮らしやすいまちづくりの視点＜暮らし続けたいくなる＞

人口減少が進む中、町内に住む多様な方々が安心して暮らし続けられるとともに、将来的に「戻ってきたいくなる」と思える環境が重要です。医療や福祉、交通など、日常生活を支える基盤の充実を図るとともに、それぞれの状況に応じて支え合える包摂的なまちづくりを進めます。

5. 基本目標

(1) 基本目標 1 時代の変化のなか、地域力を活かした共創による安心なまち

安

- ・住民と行政が共創する体制を構築し、人口減少等により時代が変化しても、先進技術を活用して、安心と信頼を支えるまちづくりを進めます。
- ・防災・医療・教育・行政サービス・DX を暮らしの基盤として一体的に捉え、制度や仕組みの充実に加えて住民同士や地域とのつながりも含めた「安心」を支えます。
- ・デジタル化や業務効率化を進めながら、災害や将来不安の軽減を図り、日常の中で「安心」が実感できる、信頼される行政運営を目指します。

<重点プロジェクト 共創で進める安心なまち運営プロジェクト>

人口減少や社会環境の変化により、行政だけで地域課題に対応することが難しくなっており、そのため、町民、企業、団体など多様な主体が役割を分担しながら関わり合い、安心と信頼を築きながら、持続可能なまちの運営を実現する必要があります。

① 町民と共に、よりよいまちづくりが行える仕組みをつくる

人口減少が進む中では、町民の積極的な町政への参加が重要です。そのため、インターネットなど多様な手法による意見提出や、子どもから高齢者まで誰もが町の施策・事業を十分に理解し、意見を提出することができる仕組みなど、町民が参加しやすく、そして町民とともに行えるまちづくりを推進します。

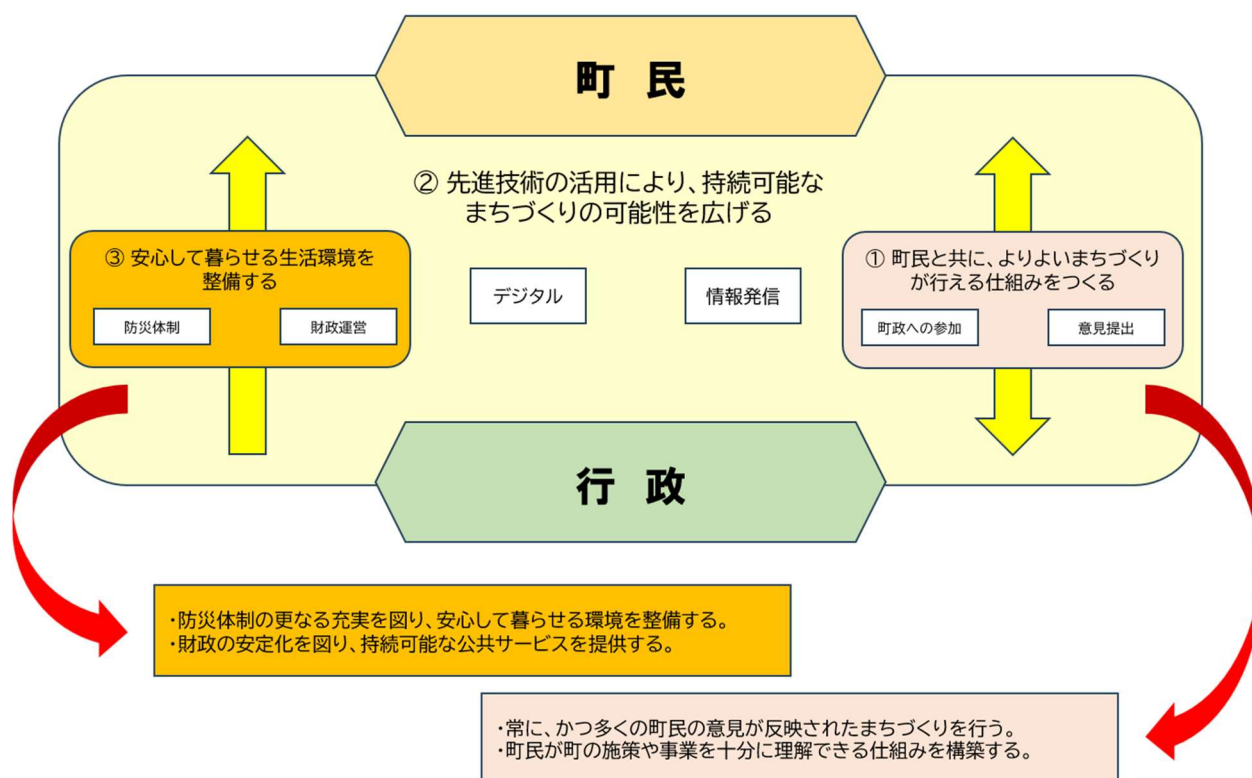
② 先進技術の活用により、持続可能なまちづくりの可能性を広げる

人口減少下におけるまちづくりには、デジタルなど先進技術の活用が必要不可欠です。アプリの導入やポータルサイトによる町民への効果的な情報提供の検討、デジタルに特化したエキスパート職員の育成などにより、デジタル技術を向上させます。全ての分野において、デジタルデバイドにも対応しつつ、人口減少下でも持続可能なまちづくりを推進することができる可能性を広げます。

③ 安心して暮らせる生活環境を整備する

近年、全国的に増え続ける大規模災害に備え、先進技術・手法の活用により危機管理の徹底が重要です。そのため、個別避難計画による災害弱者への支援やアプリなど先進技術を活用した防災に関する情報伝達手段の向上について検討します。また、今後の物価高騰等による厳しい財政運営や新たな事業に対応するため、町内事業者との密接な連携によるふるさと納税の寄附向上を図り、財政の健全化に努めます。

[イメージ図]



2

[プロジェクトを推進していくための施策]

施策	主な取り組み
町民主権による自治の推進	自治基本条例の適正な運用
DX を牽引するデジタル人材の育成・確保	デジタル人材育成・研修
デジタル技術の活用推進	デジタルツールを活用した情報発信方法の見直し
デジタル共創による地域課題解決の加速化	地域産業（農業、観光、福祉等）のDX支援
危機管理体制の充実	危機管理意識の向上
防災体制の充実、強化	地域防災計画及び国民保護計画に基づく対策強化

(2) 基本目標2 日々の暮らしやすさを紡ぎ、だれもが住み続けられるまち

紡

- ・誰もが日常生活を維持できる環境を整えるため、暮らしを支える仕組み、そして身近な見守りが自然と生まれる地域によるまちづくりを進めます。
- ・日々の暮らしやすさを支えるため、公共交通や生活サービスなどの仕組みを整え、誰もが安心して日常生活を維持できる環境を整えます。
- ・人口減少や高齢化の進行を踏まえ、地域と行政が連携しながら、誰もが住み続けられる持続可能な暮らしの基盤を形成します。

<重点プロジェクト 安心を紡ぐ生活基盤充実プロジェクト>

人口減少や高齢化の進行により、地域活動の担い手不足や住民の足となる移動手段の充実、住民を守る安全・安心対策の推進が課題となっています。そのため、地域住民同士のつながりを基盤としながら、公共交通網の機能維持と最適化、地域における防犯・交通安全対策の強化などの生活環境の充実を図り、住民一人ひとりが安心して暮らし続けられる環境を整える必要があります。

① ゆるやかなつながりにより地域共助を育む

高齢化や世帯構成の変化が進む中、住民一人ひとりのライフスタイルや関心に応じて、気軽に地域と関わり、無理なく互いを支え合う「ゆるやかなつながり」による地域コミュニティづくりを推進しつつ、いざという時に自然と頼り合える共助の土壌を醸成できるよう、地域活動や交流の機会を通じて、住民同士が顔の見える関係を築くことで、誰もが孤立せず、安心して暮らし続けられる支え合いの仕組みづくりを進めます。

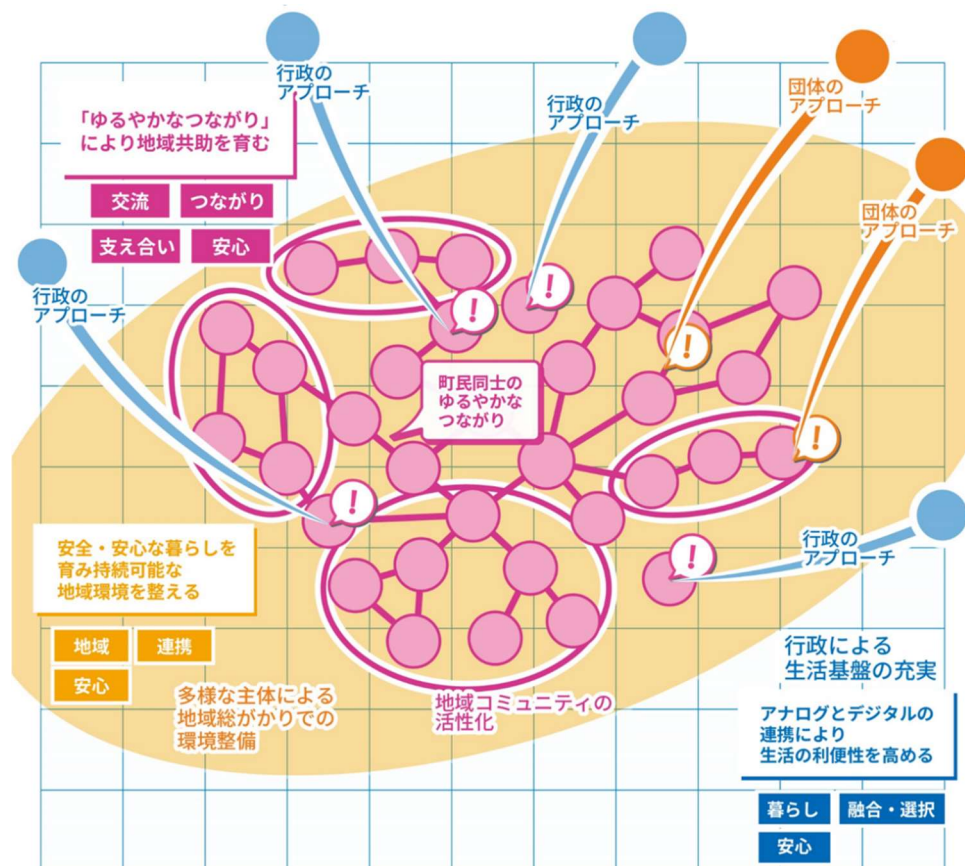
② アナログとデジタルの連携により生活の利便性を高める

誰もが安心して移動し、日々の暮らしを送れるよう、これまでのアナログな「人と人とのつながり」や「既存の仕組み」を大切にしながら、利便性向上や効率化に資するデジタル技術を段階的かつ適切に導入のうえ、アナログの温かさとデジタルの利便性を融合させることで、住民誰もが取り残されず、それぞれのライフスタイルに合わせた選択肢を持てる、持続可能な移動・生活支援体制の構築を図ります。

③ 安全・安心な暮らしを育み持続可能な地域環境を整える

住民一人ひとりの防犯・交通安全意識の向上を促すとともに、地域住民、警察、関係団体、事業者など多様な主体が密接に連携のうえ「地域総がかり」での対策を推進して、誰もが安心して暮らせる、そして未来を担う子どもたちが健やかに育つ安全な地域環境を整えます。

[イメージ図]



[プロジェクトを推進していくための施策]

施策	主な取り組み
まちづくり活動の促進	くらし安全まちづくり条例に基づいた実践活動の支援充実
コミュニティ活動の促進	コミュニティ組織や人材の育成と組織の活動支援
広報の充実	情報提供の多様化に向けた取り組み
交通安全活動の推進	交通安全啓発活動の充実
防犯対策の推進	防犯・暴迫など各活動推進
総合的な公共交通体系の構築	交通網形成における協議・検討

（３）基本目標３ 日常のつながりを協働で育て、福祉につなげるあたたかなまち

協

- ・ 困りごとを地域全体で支え合う環境、人と人とのつながりの重なり合いにより、関係性そのものが福祉として機能する、あたたかなまちづくりを進めます。
- ・ 日常のつながりを協働で育みながら、行政、町民、事業所が一体となって困りごとを支え合う環境を整えることで、誰もが安心して暮らせる地域をつくります。
- ・ 人と人とのつながりが重なり合い、関係性そのものが福祉として機能する環境を育むことで、孤立を防ぎ、あたたかさを感じられるまちづくりを進めます。

<重点プロジェクト “支え合い”と“協働”で育てる共生社会プロジェクト>

少子化の進行、高齢化や単身世帯の増加により、「地域」でのつながりの希薄化や孤立、医療や生活への不安が課題となっています。そのため、多世代や障がい者を含めた様々な健康段階の人が関わる「つながりづくり」と「見守り」や「生活支援の仕組み」を一体的に進め、地域全体で支え合いながら、安心して暮らし続けられる環境を整える必要があります。

① 多世代がつながりを深め、支え合う場をつくる

地域のつどいの場や交流活動、見守り活動などを通じて、多世代が日常的に関わり合いながら支え合う関係性を育むとともに、「顔が見える関係」や「笑顔で声をかけ合える」といった地域のつながりを推進・活性化させます。

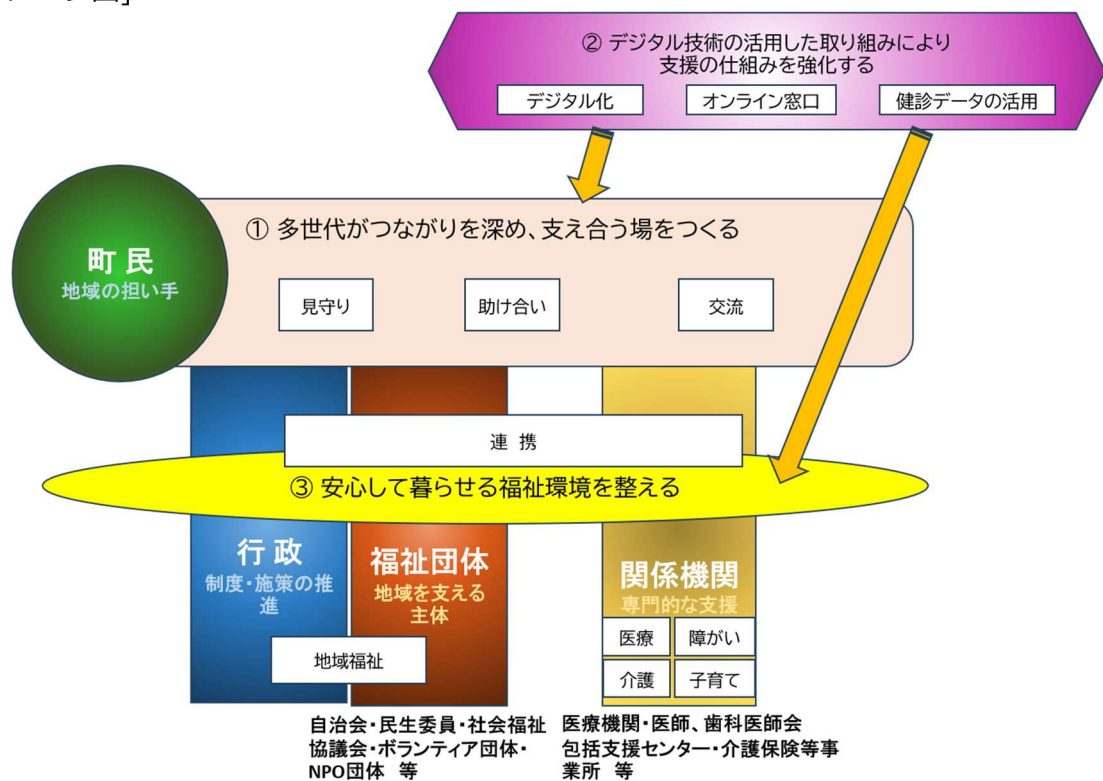
② デジタル技術を活用した取り組みにより支援の仕組みを強化する

高齢化や単身世帯の増加、担い手不足への対応のほか、子育て世帯の支援を図るため、デジタル技術や地域の力を生かした見守り・生活支援の仕組みに加え、介護ケアのデジタル化やオンライン窓口の整備、健康診査データの分析・活用による健康づくりを進めながら、限られた人材の中で「誰もが支える側・支えられる側」としてつながり、それぞれの力を生かして地域全体で支え合う「まちぐるみ」の支援体制を構築します。

③ 安心して暮らせる福祉環境を整える

子育て期から高齢期における生活の不安を踏まえ、保健・医療・介護・福祉の連携を強化するとともに、全世代を支える包括的な支援体制として、子育て世代から高齢者及び障がい者が安心して暮らし続けられる支援体制を整備します。特に、高齢期を自分らしく過ごすための健康増進を図る取り組みを実施しながら、将来にわたって安心して暮らせる環境整備を進めます。

[イメージ図]



[プロジェクトを推進していくための施策]

施策	主な取り組み
高齢社会への対応	地域における見守り体制の充実
障がい者福祉の推進体制の充実	障がい者に関する相談、指導の充実
健康づくりの推進	地域における健康づくりの推進
こども家庭センター・ファミリーサポートセンターの設置	こども家庭センターの設置
自立生活の支援	健康づくり・疾病予防の推進
保健予防、保健指導の推進	生活習慣病予防のための各種健（検）診等の実施と生活改善に向けた保健指導の実施

(4) 基本目標4 農・観・商が連動し、新たな「産」が生まれ続ける活力あるまち

産

- ・農林業や商工業、観光が有機的につながり、新たな「産」を生み出し、地域全体に活力のある経済を育てていくまちづくりを進めます。
- ・地域資源を活かしながら新たな「産」を生み出すことで、人が集い、挑戦が生まれる環境を整えます。
- ・多様な主体の関わりにより、地域全体で価値を創出し続ける仕組みを構築するとともに、持続的に活力が生まれる経済の循環を育むまちづくりを進めます。

<重点プロジェクト 新たな「かたち」を育む産業振興プロジェクト>

産業の種別を問わず、労働力不足や後継者不足が顕著となり、人口減少の中で経済規模を維持することが困難な状況に置かれており、町民生活への影響をいかに最小限にとどめるかが最大の課題です。このような状況を踏まえ、町民、企業、団体、公的機関が効果的かつ効率的に役割を分担し、移住定住の促進や関係人口の創出、各産業の「掛け合わせ」によって新たな「かたち」を生み出し、持続可能な産業基盤を構築する必要があります。

① 持続可能な産業の構築

本町の経済基盤を維持することが最重要です。そのためには、労働力確保や業務の効率化、後継者不足への対応、新規市場や販路の開拓が不可欠である。また、交通の要衝としての立地特性を活かし、基幹産業である農林業をはじめとする産業と物流ポテンシャルを掛け合わせることで、産業の基盤強化を図ります。

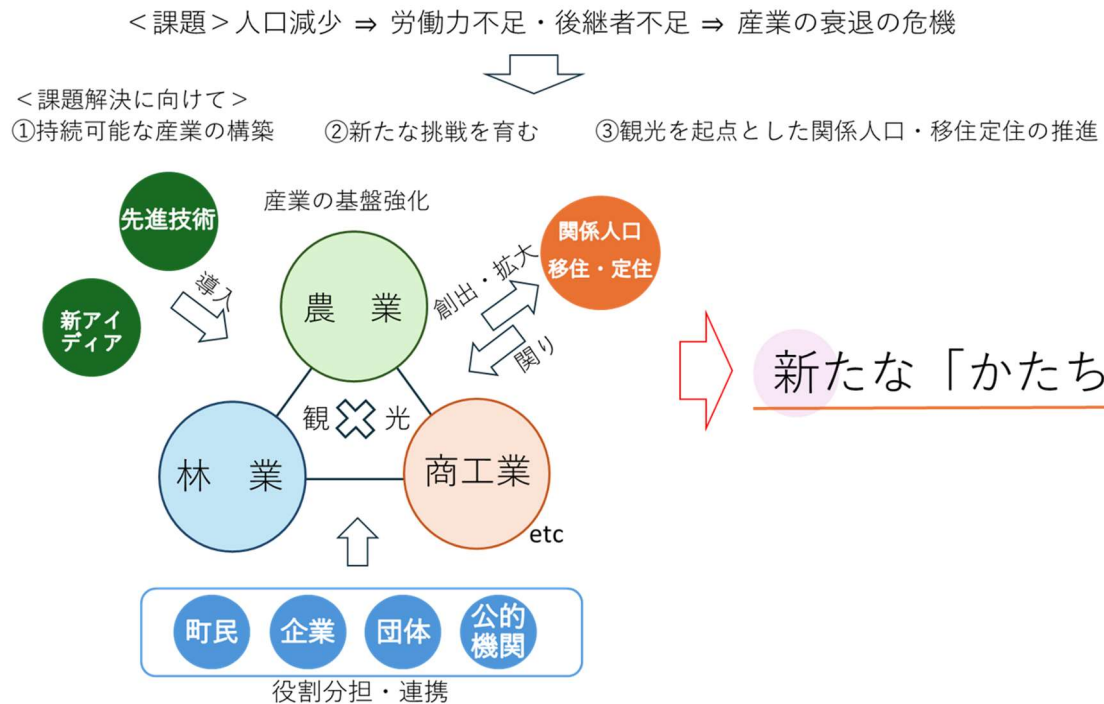
② 新たな挑戦を育む

各産業において、先進技術や新たな取り組み、アイデアを積極的に導入し、生産性の向上および技術革新を推進します。また、本町の観光業は現在転換期を迎えており、農業・林業・飲食業など様々な産業との連携による相乗効果が期待されることから、これらの分野と連携した新たな展開を戦略的に進めます。

③ 観光を起点とした関係人口・移住定住の促進

本町最大の観光資源である美幌峠を起点に、屈斜路カルデラトレイル、美幌みどりの村・峠の湯等の既存施設、基幹産業である農林業と連携することで、より深く本町に関わる関係人口を創出します。「訪れる人」が「関わる人」となり、やがて「住む人」へとつながる一連の流れを意識した一体的な取組を推進します。

[イメージ図]



[プロジェクトを推進していくための施策]

施策	主な取り組み
農業生産環境の保全・整備	農作物への食害防止対策
担い手の育成確保と生産性の向上	担い手対策及び花嫁対策の推進
生産基盤の保全・整備	共同利用施設の再編集約・合理化
既存施設や観光資源の保全、有効活用	滞在型・周遊型観光の振興
移住・定住の推進	関係・交流人口の創出
産業振興・中心市街地の活性化	地域アプリ活用による地域経済活性化

（５）基本目標５ 暮らしと環境が支え合うコンパクトで持続可能なまち

環

- ・コンパクト化による暮らしやすい都市構造、にぎわいが感じられる拠点の形成とともに、資源が循環する仕組みによる持続可能なまちづくりを進めます。
- ・人口減少を前提としたコンパクトな都市構造の形成を進め、生活に必要な機能の集約した暮らしやすい環境を整えます。
- ・環境負荷の低減や資源の循環を取り入れながら、暮らしと環境が支え合う持続可能なまちづくりを進めます。

＜重点プロジェクト 人が集い、にぎわう環境のある都市空間プロジェクト＞

人口減少により、市街地の低密度化や空洞化が進み、まちなかのにぎわいや都市機能の維持が課題となっています。そのため、にぎわいの創出と都市機能の集約を進め、持続可能な都市構造への転換と、歩いて暮らせるコンパクトなまちづくりを図る必要があります。

① 町民が関わるにぎわいの場をつくる

中心市街地の空洞化やにぎわいの低下を踏まえ、まちなかや公共空間を活用し、町民や事業者に加え町外からの来訪者も含め、世代を超えて主体的に関わるイベントや日常的な活動を通じて、人が集い、交流が生まれる場づくりを進めます。

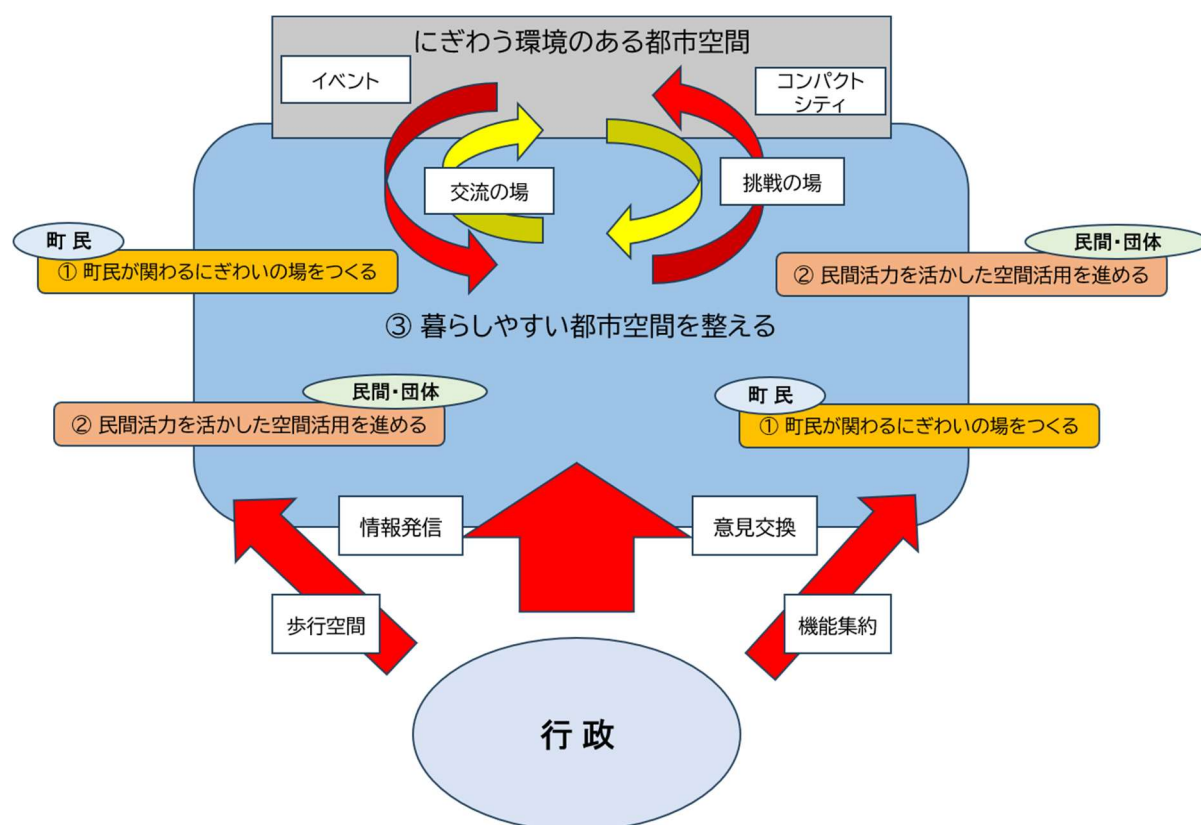
② 民間活力を活かした空間活用を進める

空き家、空き店舗など未利用地の増加に対応し、リノベーション、起業、飲食及び地域活動などの新たな挑戦の場及び新たな空間活用手法を取り入れるとともに、官民連携やエリアマネジメントの視点を取り入れながら、持続的に活用される仕組みを構築し、民間活力も活かして都市機能の集約を図ります。

③ 暮らしやすい都市空間を整える

人口の変化に合わせたコンパクトなまちづくりを進め、生活に必要な機能の集約や歩行空間の充実を図り、災害リスクが低く誰もが安心して利用できる都市空間を整備します。

[イメージ図]



[プロジェクトを推進していくための施策]

施策	主な取り組み
市街地における土地利用の推進	都市計画区域における土地利用の見直しの検討
コンパクトなまちづくり計画の推進	計画の進捗状況の確認、効果検証
町道の整備	賑わい道路など特色ある町道の整備促進
空き家対策	空家等に関する施策の総合的かつ計画的な実施
中心市街地の緑化整備	ポケットパークの整備

（６）基本目標 6 多様な学びで個性が輝き、未来に羽ばたく力を育むまち

輝

- ・子どもから高齢者まで誰もが自分に合った学びを選択できる環境を充実させ、一人ひとりの個性が輝き、誰もが輝く未来を描けるまちづくりを進めます。
- ・国際的な視野とふるさとへの誇りと愛着を併せ持つグローバル人材を育成し、未来に向かって挑戦できるまちづくりを進めます。
- ・ふるさとへの誇りと愛着を持ちながら、地域と関わる学びを通じて多様な力を育む環境を整えます。

＜重点プロジェクト 人が輝き、育ち、学び続けられるまちプロジェクト＞

乳幼児期から成人期、高齢期まで、人生100年時代を心豊かに生きるため、学びの機会の充実を図ることが課題となっています。そのため、質の高い教育施策を切れ目なく展開し、郷土への愛着と誇りを持つ人材を育成するとともに、生涯を通じて学び続けられる環境を整え、すべての人が輝けるまちを創造する必要があります。

① ふるさと美幌を愛し、夢を持って学ぶ機会をつくる

地域の自然や歴史、産業、観光など「生きた教材」を活かした体験型・探究型の学びを充実させることで「ふるさと教育」を推進するとともに、自らも将来の「生きた教材」のような地域のサポーターとして活躍したいという夢を持ち、このまちと関わり続けたいと思える仕組みを整備します。

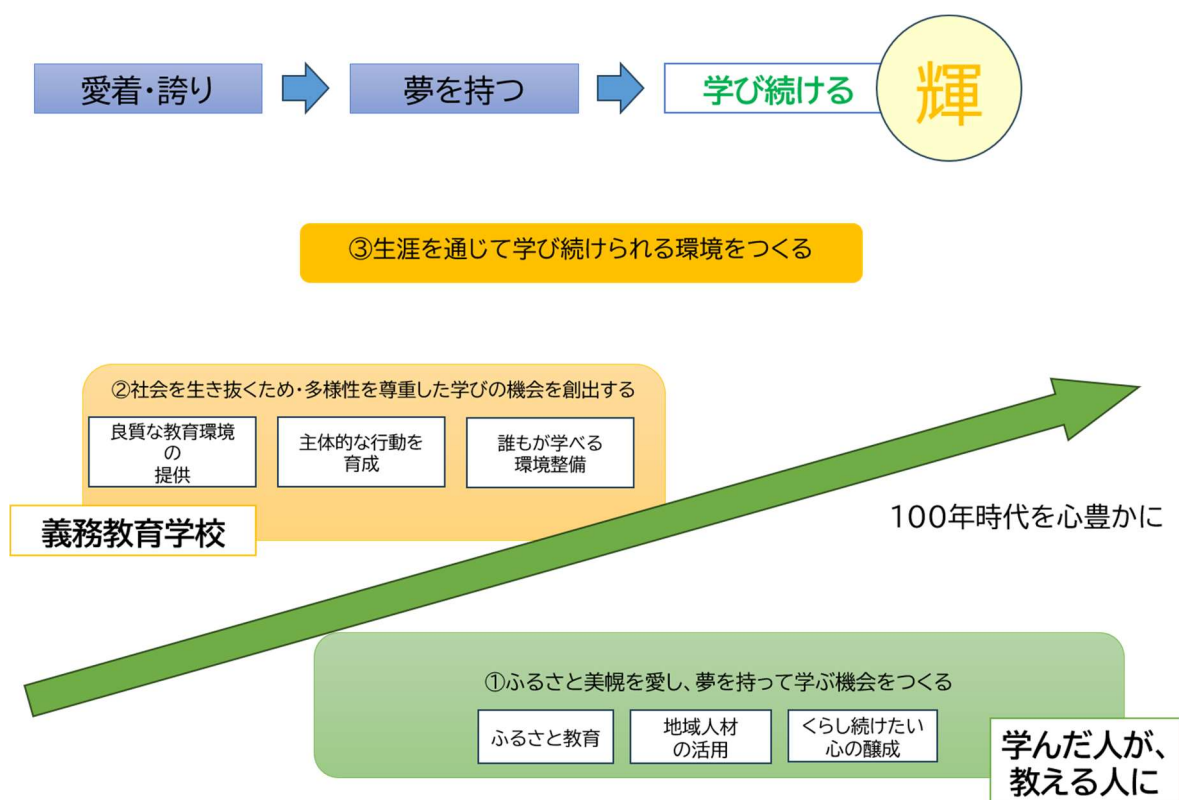
② 社会を生き抜くため・多様性を尊重した学びの機会を創出する

子どもたちの良質な教育環境を整えるため、義務教育学校の整備と小中一貫教育の導入を進め、未来に向かって創造的に考え、主体的に学び行動する子どもを育てます。その過程では、知識の習得に加え、「デジタル活用力」「論理的な解決力」「多様な人と協力する力」を重点的に養います。また、いつでも、どこでも、誰もが学べる環境を整え、一人ひとりのスタイルに合わせた学びの機会を創出します。

③ 生涯を通じて学び続けられる環境をつくる

生涯学習の機会を深化させるとともに、子どもからお年寄りまで、誰もが楽しく元気に学び、活動できる機会を設け、「この町で学び続けたい」という意欲を高めるための環境を整えます。

[イメージ図]



[プロジェクトを推進していくための施策]

施策	主な取り組み
小中学校の教育内容の充実	体験型・探究型の学習によるふるさと教育やキャリア教育の充実
小中一貫教育の推進	義務教育学校の開校
高等学校教育の充実	魅力的な高校づくりの推進
生涯学習の推進体制の確立	地域人材の発掘、登録と活用促進
生涯スポーツの振興	スポーツ振興の充実

